## 世界名作劇場

# 小公女(プリンセス)セーラ

『はじめての授業』（仮）

第 3 話

制作　日本アニメーション
　　　フ ジ テ レ ビ

脚本中西隆三

# 登場キャラクター

セーラ・クルー（7）

ミンチン院長

アメリア先生

ピーター

マリエット

ラビニア（11）

ガートルード（10）

ジェシー（10）

アーメンガード（9）

ロッティ（4）

デュファルジュ先生

スーザン（5）
ジェイン（6）
ペネラビ（6）
ジェニファ（7）
ダイアナ（8）
クリスティーン（9）
リンダ（10）
ドルシラ（10）

エミリー（人形）

シーザー（猫）
ジャンプ（小馬）
ボナパルト（オウム）

1 ミンチン女学院・全景

雪の残る屋根や街路に、朝日が差している——
何処からか、教会の鐘の音。

セーラのN「昨夜、インドへ発ったお父様とお別れしてから、私は、
ほとんど眠れずに朝を迎えました……」

2 同・セーラの寝室

ベッドで背板に凭れ、じっと父と母の写真をみつめて
いるセーラ、脇にエミリー。

セーラ「エミリー、よく眠れた？……今日から私、あなたと二人切
りなのよ……心配だけど、頑張るつもり……」

3 同・三階廊下

アメリアが振鈴を鳴らして来る。
アメリア「皆さあん……起床ですよォ」

## 4 同・ラビニアたちの部屋

その振鈴に、ラビニアが飛び起きる。
続いて眠そうに起きるジェシーとガートルード。
ジェシー「あああ、眠いわぁ」
ガートルード「あたしも、ファファファァ」
あくびする二人に、ラビニアが厳しく、
ラビニア「あんたたち、昨夜遅くまであの新入生の噂話してるからよ」
ジェシー「だって……」
ガートルード「ねェ……」
ラビニア「なによ、少しばかり可愛くて、お父さんがお金持だって

だけじゃない。騒ぐなんて変よ」
首をすくめるジェシーとガートルード。
ラビニア、口をあけて眠っているアーメンガードに気がつく。
ラビニア「起きなさいってば……朝食に遅れたらミンチン先生に叱られるのは私なんだから」
乱暴に毛布をはがす。
吃驚してはね起きるアーメンガード、
アーメンガード「は、はい、院長先生……」
途端にベッドから転げ落ちる。
どっと笑うジェシーたち――

5

同・セーラの部屋

廊下からノックの音――

寝室から出て来るセーラ。

セーラ「はい……」

ドアへ行き、開ける。

湯気を立てた大きなポットを盆に乗せたマリエットが挨拶する。

マリエット「お早うございます、お嬢様……」

セーラ「お早う、マリエット」

マリエット、入る。

マリエット「昨夜、よくお寝みになれまして」

セーラ「ええ、少しだけど……」

マリエット「お顔を洗うお湯をお持ち致しましたわ。それから着換えのお手伝いを……」

セーラ「有難う、マリエット……」

6

同・表の廊下

階段を上って来たジェシーとガートルードが、そっとドアの隙からセーラの部屋を窺う。

7 同・セーラの部屋

開いた衣裳戸棚の前で、セーラの着換えを手伝うマリエット、背のボタンをとめ、髪のリボンを直す。

マリエット「はい、これでいっそう可愛くおなりになりましてよ」
セーラ「有難う、マリエット……」

8 同・表の廊下

窺っていたジェシーとガートルード、顔を見合せて肩をすくめると、階段へ駆け去る。

9

## 同・地下の食堂

ラビニアたちが席についている。
駆け込んで来たジェシーとガートルードがラビニアの
脇の空席について報告する。

ジェシー「ほんと、凄い服……まるでプリンセス様様よ」

ガートルード「メイドに着換え手伝わせて……お金持ちの娘だから
って、特別扱いしすぎよねえ」

ラビニア「やめてよ……あの子の話なんて、聞きたくもないわ」

そこへアーメンガードと、更に遅れてロッティが入っ
て来る。

ラビニア「遅いわよ、アーメンガード……それからロッティも」

ロッティ、たちまちベソをかく。

ロッティ「またおこるぅ……」

その時、アメリアと一緒に入って来るミンチン——

ミンチン「ラビニア……みんな揃いましたね」
ラビニア「はい、院長先生……」
ミンチン「では、ラビニア、朝のお祈りを……」
ラビニア「はい……」

手を組む。

一同も手を組み頭を垂れる。

ラビニア「天にまします父なる神さま、私たちに与え給うた御恵(みめぐみ)の全てに感謝致します。今頂く食事も私たちの良き糧(かて)となり、私たちも神様のお役に立ちますよう御恵をたれ給え、アーメン」

10

同・セーラの部屋

テーブルで、独り祈りを終るセーラ。

テーブルには、キツネ色に焼いた薄切り三角トースト、

魚の燻製、ベーコン、エッグに、きれいなリンゴ。
マリエットが、毛糸編みの帽子をのせた陶器のポット
から、熱い紅茶を、次いで銀のポットからミルクを、
カップに注ぎ、砂糖を入れてくれる。
セーラ「有難う、マリエット……」

11 同・地下の食堂

食事に加わらぬミンチンが見廻っている。
質素なオートミールの皿から音もなく食べている女生
徒たち――
カチャリとアーメンガードがスプーンを皿に落す。
キラッと見るミンチン――
ミンチン「アーメンガード、スプーンの音を立ててはなりません」
アーメンガード「はい、院長先生……」

そっと肩をすくめて笑い合うジェシーとガートルード。

12 同・セーラの部屋

一般生徒とは違う豪華な朝食をとるセーラ。

傍にマリエット。

マリエット「院長先生に叱られてしまいましたわ」

セーラ「え……」

マリエット「これからは、食堂で皆さんと一緒に食事をとるように

と……それが規則なんですって」

セーラ「まあ……私、みんなもお部屋でお食事するのかと思ってたの」

マリエット、微笑で首を振る。

マリエット「今日だけは、特別に院長先生にお願いして、お部屋にお食事を運びましたの……だって、はじめて逢うお友

達の中でお食事するなんて、お嬢様がお気の毒ですもの」

セーラ「マリエット、気をつかって下さって有難う……でも、私、大丈夫。きっとすぐにこの学校に馴れると思うわ。規則の事にも……」

マリエット「そうかがうと私も安心致しますけど……そうそう、お嬢様のお支度が出来たら、院長室に見えるようにと……」

セーラ「判ったわ、マリエット……」

13 同・馬車置場の表

残雪の中を駆けて来るピーター、扉をあける。

14 同・馬車置場の中

入って来るピーター。

ピーター「お早う、ジャンプ」

繋がれていたポニーが嬉し気に啼く。

ピーター「よしよし、昨夜は雪で寒かったなあ……さ、これをお食べ」

ポケットから出した人参をたべさせる。

いなないて食べるジャンプの首を叩き、

ピーター「よかったなあ、お前もぼくも……素晴しいお嬢様に傭って貰ってさあ」

いななくジャンプ――

ピーター「さ、お互いにお嬢様のためにしっかり働こうぜ」

再びいななくジャンプ――

15

同・セーラの部屋

安楽椅子に坐らせたエミリーに、開げた本を置いて話しかけるセーラ。

セーラ「いいこと、エミリー……私、これからお勉強がはじまるの……だから、このご本を読んで、おとなしく待っているのよ」

寝室から、シーツを抱えて出て来たマリエットが、驚いて立尽す。

マリエット「まあ、お嬢様……お人形とお話してらしたんですか」

セーラ「シイッ……」

口に指をあてて立上る。

セーラ「（小声）エミリーはね、ほんとは私たちの言葉が判ってるの……でも、それをみんなに知られたくないのよ」

マリエット「ンまあ……」

その時、スタンドの籠の中で、ボナパルトが喋る。

ボナパルト「セーラ……セーラ……」

セーラ「ほら、オウムだって、お話し出来るでしょ」

マリエット、笑い出す。

マリエット「そうでしたわね、お嬢様……」

セーラ、ボナパルトに話しかける。

セーラ「ボナパルト……あなたも、おとなしく待ってるのよ」

ボナパルト、オウムの習性で何度も頷くように頭をたてに振る。

セーラ「じゃ、マリエット、お勉強に行って来ます」

マリエット「はい、頑張るんですよ、お嬢様」

セーラ「ええ……」

セーラ、出て行く。

微笑で見送るマリエット、呟く。

マリエット「面白いことを仰言やるお嬢様……でも、なんて可愛らしいんでしょう」

16

同・廊下

ビクンと立停るセーラ――
階段口に、頑張っているシーザーが、偉そうに啼く。
セーラ「あの……私、院長先生の所へ行かなくてはいけないの……
お願いだから、仲良くしましょうね」
シーザー、プイと横を向いたが、階段を降りて行く。
ほっとして階段を降りるセーラ――

17

同・二階の階段

偉そうに降りて来るシーザー。
後れて降りて来るセーラ、一階への階段へ――
×　　×　　×
廊下のドア前で、本を抱えたジェシー、アーメンガー

ドたちが、見送って囁き合う――

18 同・一階の階段

シーザーが降りて来る――続いてセーラ。
シーザーは、廊下を院長室の方へ。
セーラも、続く形になる。

19 同・院長室の前

立停るシーザー、セーラを振返る。
セーラ、来たが、シーザーを気にしながら、そっとドアをノックする。
中から、
ミンチンの声「入りなさい」

セーラ、そっとドアを開ける。
その足許を素早くすり抜けて中に入るシーザー。
セーラ、驚いたが、ドアに入る。

×　　×　　×

離れて見送ったジェシー、ガートルードたちが、肩をすくめて教室の方へ急ぐ。

20 同・院長室

シーザーが、ひょいと暖炉の上に飛び上る。
思わず気をとられるセーラ。
背を向けて書き物をしていたミンチンがジロリと振り返る。
ミンチン「朝の挨拶はでうしました?」
はっとなるセーラ、急いで云う。

セーラ「お早うございます、院長先生」

ミンチン「お早う……どうも、あなたには教えなければならない事が沢山あるようですね」

たじろぐセーラ。

ミンチン「はいと仰言い」

セーラ「はい、院長先生」

ミンチン「この学校は、あなた方が将来立派なレディとなる事を目的として教育しています。その為には、多くのシツケや規則を守って貰わねばなりません」

セーラ「はい、院長先生」

ミンチン「礼儀は正しく……」

セーラ「はい、院長先生……」

ミンチン「外出には私の許可が必要です」

セーラ「はい、院長先生……」

ミンチン「廊下を走ってはいけません」

セーラ「はい、院長先生……」
ミンチン「食事の不満はもっての他です」
セーラ「はい、院長先生……」
次第に硬くなるセーラ――

――C・M――

21 同・院長室

ミンチン「判りましたね」
セーラ「はい、院長先生」
ミンチン「では、規則の事はこの位にして……」
と机から薄い教科書を一冊とり、渡す。
ミンチン「これが、今日からあなたが勉強するフランス語の教科書です。教室の空いている席について、見ておきなさい」
セーラ「はい、院長先生……」

22 同・廊下

ドアを出て来るセーラ、ほっと息をつくと、教室の方へ歩き出す。

23 同・教室の前

来るセーラ、立停る。
――閉ったドアの中から、女生徒たちが騒ぐ声。
セーラ、ためらったがドアを開ける。

24 同・教室

驚いた女生徒たちが、どっと自席に戻る。
――ドアに立つセーラ、立尽す。
一斉にセーラを見ているラビニア以下全員の眼、眼、眼――
――セーラ、たじろいだが、一番前の空席に行き、静かに坐る。
忽ちガートルードとジェシーが、ラビニアに囁く。

ジェシー「見て……あの子の足……あんなに足首が細くて、足だっ
　てお人形みたい……」
ガートルード「私なんて、いつも太くて不恰好だって云われてるの
　　に……」
ラビニア「フン、靴のせいよ。上等な靴屋で作らせれば、大きな足
　でも小さくスマートに見せられるって、お母様が云って
　たわ」
　――その声を耳に、セーラ、落着こうと渡されたフラ
　ンス語の教科書を開く。
　それは絵入りの初歩本で、家族の絵に「父」「母」「
　兄」「姉」などのフランス語の単語がのっているだけ。
　――吐息をつくセーラ。
　囁く声がかぶる。
ガートルードの声「それに、あのきれいな髪……くせがなくて、柔
　　かそう……」

ジェシーの声「ほんと。私なんて、くせっ毛で、毎朝困ってるのに
……」
本の蔭で肩をすくめるラビニア。
ラビニア「専用メイドに手入れさせてるだけよ。髪だって黒すぎる
し、近くで見るとみんなが云う程きれいな子じゃないと
思うわ」
――セーラ、身のすくむ思い。
カチリとドアが開いて、ミンチンが入って来る。
一斉に本を拡げて自習のふりをするジェシー、ガート
ルードたち。
教卓に立ったミンチンが、
ミンチン「セーラさん、前に……」
セーラ「はい……」
セーラ、席を立つと、ミンチンの傍に行き一同の方へ
向き直る。

ミンチン、セーラの肩に手をかけて、

ミンチン「皆さん……新しいお友達を紹介します……セーラ・クルーさんです」

セーラ「セーラです。よろしく」

ミンチン「ラビニア……」

ラビニア「はい……（立つ）」

ミンチン「インドのボンベイを指して」

ラビニア「はい……」

前に出ると、掛けた世界地図（英国中心）のボンベイを指す。

ミンチン「そう……席に戻って」

ラビニア、席に戻る。

ミンチン「セーラさんは、この学校で、立派な教育を受けるために……」

と教鞭で世界地図をたどる（喜望峰廻り）。

ミンチン「遠いインドから、はるばる船で、このロンドンまで、来たのですね……そうですね、セーラさん」

セーラ「いえ、スエズ運河を通ったのです」

ミンチン「（むっとなる）そんな事はどうでもよろしい」

ミンチン、威厳を取戻し一同に告げる。

ミンチン「では、皆さん、セーラさんと仲良く勉強するように」

応ずる一同――

ミンチン「セーラさん、席に戻りなさい」

セーラ「はい……」

セーラ、席に戻る。

ミンチン「セーラさん、そのフランス語の教科書は、開いてみましたね」

セーラ「はい……」

ミンチン「よろしい……この学校では、フランス語の授業に特に力を注いでいます。あなたのお父様も、その事を大変喜ん

でおられました」

セーラ「あの……」

ミンチン「なんです……」

セーラ「私、正式にフランス語を習った事はないんですけど……」

ラビニアたち、優越の忍び笑い。

ミンチン「静かに……セーラさん。はじめて外国語の勉強をする時は、誰でも心配なものです。けど、それを乗り越える努力をしなくてはいけません」

セーラ「でも……」

ミンチン「セーラさん……」

ミンチン、怒りを押えて続ける。

ミンチン「もう一つ、あなたに教えておく事があります。なにかなさいと云われた時、でもなどと口答えする事は許しません」

セーラ「……はい」

ミンチン「では、デュファルジュ先生をお呼びして来ます。静かに
勉強を続けなさい」
ミンチン、出て行く。
忽ち、ジェシーとガートルードがセーラの前に来る。
ジェシー「私、ジェシー……あなたより三つ年上の筈よ」
ガートルード「私はガートルード。同じくあなたより三年先輩よ」
セーラ「よろしく……」
ジェシー「皆を紹介してあげるわ、来て」
ジェシーとガートルード、セーラをラビニアの前に連
れて行く。
ジェシー「ラビニア・ハーバード。この学校の代表生徒よ」
ガートルード「お父様は、アメリアで油田持ってるの」
セーラ「よろしく」
ラビニア、威厳で頷くと、集って来る一同を見て、
ラビニア「一応皆を紹介しておくわ……学校一ののろまさん、アー

メンガード」
どっと笑う一同。
アーメンガード「（おずおずと）よろしく」
ラビニア「ドルシラ……お父さんは炭坑の重役よ」
ドルシラ、会釈――
ラビニア「リンダ……お父さんは、鉄道会社の技師長……」
リンダ、会釈――
ラビニア「クリスティーン……アイルランドから来た子」
クリスティーン、会釈――
ラビニア「ダイアナ……とてもおしゃれ」
ダイアナ、すまして膝をかがめる。
ラビニア「ジェニファ……いたずらっ子」
ジェニファ、首をすくめ舌を出す。
ラビニア「ペネラビ……お医者の子」
ペネラビ、挨拶――

ラビニア「ジエイン……お父さんは工場長」
ジエイン、挨拶――
ラビニア「スーザン……軍人さんの子」
スーザン、挨拶――
ラビニア「そして、学校一の泣き虫、ロッテイ」
どっと笑う一同――
ロッテイ「ああん、またワルクチ云う……」
ラビニア「ね、あなた、はじめてお父様と来た時、ミンチン先生になんと云われて？」
セーラ「え……」
ジェシーが、ミンチンの声色で続ける。
ジェシー「まあまあ、なんて美しいお嬢様でしょう。それに、とても利巧そうでいらっしゃる……」
セーラ「え、ええ……」
どっと笑うガートルードたち。

ラビニア「私もそう云われたのよ」
ジェシー「あの人、はじめて来た父親には、みんなお世辞云うのよ」
ガートルード「親がお金持だと見ると特にね」
ラビニア「だから、あなたが、その通り美しくて利巧だなんて思ったら大間違い。それだけは教えといてあげるわ」
セーラ、茫然――
廊下に、咳払いが聞える。
ラビニア「シッ、みんな席に戻って」
一同、一斉に自席に駆け戻る。
同時にドアが開いて、デュファルジュと続いてミンチンが入って来る。
デュファルジュ「ボンジュール、マドモワゼル……」
一　同「ボンジュール、ムッシュウ……」
その中で、一人俯向いているセーラ。
デュファルジュ「ほう、この子でしたな、私の新しいフランス語の

生徒は」
ミンチン「そうですの、デュファルジュ先生……処が、この子はインドで育ったせいかフランス語と聞くだけで毛嫌いしてるようで、困ってますの」
デュファルジュ「ほう、それは残念ですな、マドモワゼル」
セーラ、思い切って、顔をあげる。
セーラ「違うんです。私、フランス語が嫌いではないんです」
ミンチン「なにが違うんです。先生にお話する時は、席を立ってお話なさい」
クスクス囁き合うジェシーたち。
セーラ、仕方なく立上ると訴える。
セーラ「Professeur Dufarge……」
デュファルジュ、（む……？）と眼をむく。
ミンチンも驚く。
セーラ、流暢なフランス語で続ける。

セーラ「Ma mère est Fran,caise, Ma langue natale est le Francais……」

——驚くラビニアたちの顔、顔、顔。

セーラ「J'ai compté dire que ce livre est trop facile, mais, je ne l'ai pas pu……」

デュファルジュの眼が、更に見開かれ、大きく頷き返す——

デュファルジュ「オウ……ウィ、ウィ、ウィ……マドモワゼル……」

啞然と立尽すミンチンに、楽し気に振返る。

ディファルジュ「聞きましたか、ミンチン先生……」

ミンチン、茫然のまま——

デュファルジュ「この子は、こう話したのですよ……私の母は、フランス人です……私はフランス語で育ちました……ですから、この教科書では、私にはやさしすぎるのです……そう云おうと思ったのですけど、う

まく云えなかったのです……とね」
ミンチン「（思わず）まあ……」
デュファルジュ「この生徒に、私が教える事はあまりないようですな。発音と云い、言葉づかいと云い、素晴らしい。フランス人そのものです」
ミンチン、怒りに震える。
ミンチン「な、なぜそれを隠していたのです」
セーラ「（途惑う）いえ、隠していたのでは……云おうとしたのですけど、先生に口答えはいけないと……」
ラビニアたち、本の蔭でクスクス笑う。
ミンチン「静かに……静かになさい……セーラさん、なんと云う態度です……あなたはこの私を、悔辱したのです！」
ミンチン、黙ってドアを出て行く。
唖然と見送ったデュファルジュ、フランス風に大手を拡げ、肩をすくめる。

こらえていた一同、どっと笑う。
素早くセーラに囁くジェシーたち。
ジェシー「やったわね、あなた」
セーラ「え……」
ガートルード「フフ、ミンチン先生はね、本当はフランス語が苦手なのよ」
ジェシー「あなたが話したフランス語、半分も判ってないと思うわ」
セーラ「でも……私、先生を侮辱するつもりなんてなかったのに……」
ラビニア「（冷笑）もう遅いわ……あの人、きっと一生あなたを憎み続けるわ。凄く執念深いんだから」
——茫然となるセーラ。

25 同・院長室

荒々しく入って来るミンチン――
シーザーを抱いていたアメリアが驚いて立上る。
アメリア「お姉様、どうなさったの」
ミンチン「なんでもありません！」
振り切るように、自分の机に行くとこめかみを両手で押える。
アメリア「でも、顔色が……また頭痛ですのね。今、お薬を」
ミンチン「いりません、そんなもの」
アメリア、その語気に吃驚する。
ミンチン「あの子には、注意する必要があります」
アメリア「え……」
ミンチン「セーラ・クルーです……あの子は父親や使用人にチヤホヤされすぎて、人を傷つける事など平気なのです」
アメリア「（怪訝）でも、セーラさんは、とても良い子だと思いますわ。お姉様も、あの子は、この学校にとって大切な生

徒だと」

ミンチン「判ってます。でも、あの子は徹底的に矯正する必要があります。私の手で」

じっと考えるミンチンと、驚くアメリア。

26 同・セーラの部屋（夜）

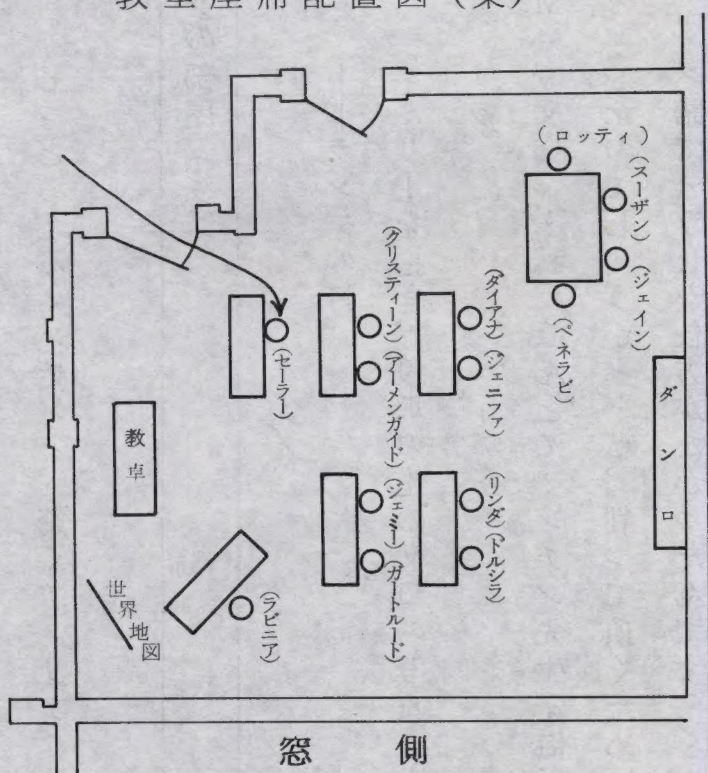
――ランプの灯。

エミリーを抱き、暖炉の上の父母の写真をみつめるセーラ。

セーラのM「お父様……私、ほんとにミンチン先生を侮辱してしまったのでしょうか……私、判って頂くために、フランス語で云うしか仕方がなかったんです……」

おわり

教室座席配置図（案）



（ロッティ）
（スーザン）
（ジェイン）
（ベネラビ）
（クリスティーン）
（ダイアナ）
（ジェニファ）
（セーラー）
（アーメンガイド）
（ジェミー）
（リンダ）
（トルシラ）
（ガートルード）
（ラビニア）
教卓
世界地図
ダンロ
窓側